



生の記録を後世に

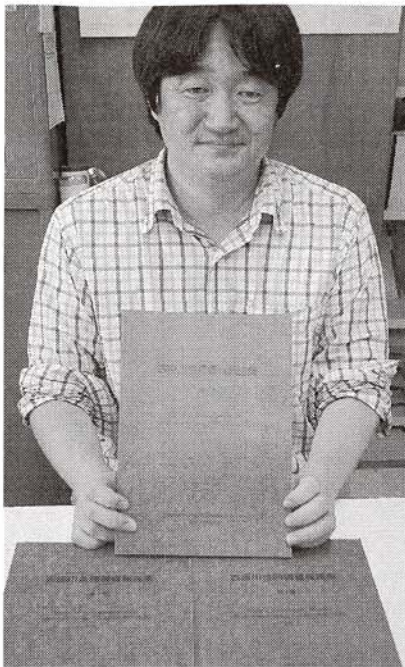
清流取り戻すきっかけに

京大紀伊大島実験所

京都大学フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所(串本町)は、センターが中心になって2005年から進めている「古座川合同調査」の報告書第1巻をまとめた。梅本信也所長は「かつての古座良き古座川に戻すきっかけとして、調査の

生の記録を後世に残したい」と話している。「清流」と呼ばれている古座川だが、報告書には、いったん濁ってしまったと長期間改善されなくなってきたこと、護岸工事や土砂の流入で、小右座川の現状と過去について知り、かつての清流や風景に戻す手掛かりにし

り、それまでなかったツルゴンが群生してしまったことなど、以前に比べると大きく環境が変わってきていることが紹介されている。調査は同センターが古座川の現状と過去について知り、かつての清流や風景に戻す手掛かりにし



完成した「古座川合同調査報告書」(20日、串本町須江で)

ようと進めている「古座川プロジェクト」の一環。この調査は50年をめぐりにしており、2年に1巻、計25巻の報告書をまとめた」としている。

報告書は05年9月から07年7月まで、1〜3カ月おきに実施した20回分の調査を189頁にまとめた。同センター教員や職員、京都大学や大阪府立大学、京都教育大学などの学生や教員、県水産試験場内水面試験地研究員ら約40人が参加し、水質や川にすむ生物、周辺の植物、流域文化などを調べた。報告書には調査結果のほか、調査当時の古座川に関する出来事や聞き取りした住民の考えなども盛り込んでいる。

表紙の緑色は古座川流域や近くの海岸にあり、生活に利用されていた松林をイメージ。当時の景観を復活させたいとの思いを込めたという。

梅本所長は「生活の変化や治水対策などで川に負荷がかかり戦後、文化や生物相が激変した。良

かったころに戻すには現状と過去を知ることが大事」という。500部作製した。古座川について学びたい人

には譲るといふ。問い合わせは同センター紀伊大島実験所(0735・65・0125)へ。